

## 意識の表象理論における例化の問題

慶應義塾大学 篠崎大河

### はじめに

物理主義は、世界を統一的に理解するための有望な立場でありながら、乗り越えるべき障害も多い。物理主義にとって最大の障害だと思われるのは、経験において現れる質感、クオリアの存在である。物理主義を擁護するために、クオリアの物理主義的還元を試みる理論がいくつか提出されているが、中でも有望なものとして、「意識の表象理論」がある。

意識の表象理論にはバリエーションがある一方で、ある基本的な方針を共有している。すなわち、クオリアを経験が表象する対象の性質として説明することである。この説明は主としてクオリアの物理主義的還元を利用されるため、意識の表象理論は還元主義の一つとして提案されることが多い。このような意識の物理主義的還元は一見成功しているように思われ、多くの論者がこのアプローチを採用している。

しかし、意識の表象理論は、「例化の問題」という重大な難点を抱えている。例化の問題とは、経験によって表象される性質は、錯覚や幻覚の場合、実際には例化されていないため、そのようなとき意識に現れている性質を実在していると考えることができないというものである。この問題を解決できないとすると、意識の表象理論は、意識の実在性がある意味で認めることができず、その還元主義としての立場を諦めざるをえないことになる。ただ、このことは物理主義の行き詰まりを意味しない。意識の表象理論は、クオリアを物理主義的に還元できないなら、消去主義的説明として捉え直され、その物理主義的立場を貫徹することができるからである。本論の目的は、意識の表象理論が抱える例化の問題とは何かを明らかにし、それがクオリアの消去主義の可能性を示唆していることを示すことである。

そのためにまず、第1節では、クオリアの定義を確認した後、意識の表象理論がいかにしてクオリアの物理主義的還元を試みるのか、その戦略を見る。第2節では、一見、物理主義的還元成功したかに見える表象理論が直面する、例化の問題について説明する。第3節では、例化の問題に対する表象理論からの応答を見、それらが問題点を持つことを明らかにする。最後に第4節では、例化の問題が、クオリアの消去主義が真剣な検討に値することを示唆していることを示す。

## 1. 意識の表象理論の説明戦略

クオリアとは、ある経験を持つとは〈どのようなことか(*what it is like*)〉によって経験を分類しうるような、経験の内在的性質である(cf. Nagel 1974; Chalmers 2010)。例えば、紫色のアサガオを見る経験を持つときに感じられる紫色の質感などは、その質感を経験するとはこのようなことである、というような何かがあり、それによって、その経験を例えば緑色のものを見る経験から区別することができるように思われる。そのため、そのような質感はクオリアであるとされる。この意味でのクオリアを物理主義的に理解することは困難である。というのも、経験に内在的であるようなクオリアが、原則的に関係的・機能的であるような物理的性質によって説明されるようには思われないからである(cf. Chalmers 2010)。

一方、意識の表象理論の目的は、典型的には、クオリアに物理主義的な説明を与えることである(e.g. Dretske 1995; 信原 2002; 山口 2012; 鈴木 2015; Lycan 2019)<sup>1)</sup>。では、それはいかにして達成されるのか。結論から述べると、意識の表象理論はクオリア概念に修正を加えることでその物理主義的還元を試みる。この戦略は二つの段階に分けることができる。第一段階は、従来のクオリア概念の問題を指摘し、クオリアに対する新しい説明を動機づけること、第二段階は、新しいクオリア概念が物理主義的に還元可能なものであることを示すことである。順に見ていこう。

まず、クオリアを物理主義的に還元する戦略の第一段階として、表象理論は従来のクオリア概念の問題点を指摘する。

従来のクオリア概念は、ある経験を持つとは〈どのようなことか〉によって経験を分類しうるような、経験の内在的性質であった。ここで重要なのは、それが、経験そのものが持つ内在的性質であるということである。意識の表象理論が指摘する従来のクオリア概念の問題点とは、まさにその条件に当てはまるようなものはそもそも存在するようには思われない、ということである。表象理論の擁護者は「経験の透明性」に基づいてこの批判を展開する(e.g. Harman 1990, Tye 2014, 鈴木 2015)。経験の透明性とは、我々が意識経験をを持つとき、そこで主観的に気づくことができるのは経験している対象が持つ性質であり、経験そのものが持つ性質に気づくことはできない、すなわち、経験そのものは透明であるということである。例えば、アサガオの花を見るときに我々が気づく性質は、紫色であるとか、直径が約 6cm であるとか、手の届く距離にあるとかさまざまであるが、それは経験の対象であるアサガオの性質であって、経験の性質ではない。

つまり、従来のクオリア概念は経験の内在的性質であるが、そのような性

質を我々が主観的に見出すことはない、ということである。このことが正しければ、従来の意味でのクオリアは存在しないことになる<sup>2)</sup>。

次に、クオリアを物理主義的に還元する戦略の第二段階として、意識の表象理論はクオリアに対して新しい説明を用意する。すなわち、表象理論は、クオリアを経験が表象する対象の性質として説明する(cf. Dretske 1995, p. 65)。

ここにおいてクオリア概念は、従来のものから重要な変更が加えられている。すなわち、クオリアは、経験そのものが持つ性質ではなく、経験の対象が持つものとして、経験が表象する性質というように捉えなおされる<sup>3)</sup>。すなわち、タイの言うように、表象理論における「外的性質は、クオリア実在論的な見方におけるクオリアの対応者となる」(Tye 2014, p. 48)。このような外的性質は外界の対象に物理的に例化されている性質であるので、もしクオリアが外的性質だとすれば還元が成功したことになり、クオリアは確かに自然界に存在する性質であると言える<sup>4)</sup>。

意識の表象理論による以上の説明が正しければ、クオリアは物理主義的に問題のないものであったことになる。しかし、このような説明は本当にうまくいっているのだろうか。

## 2. 例化の問題

前節では意識の表象理論がクオリアを物理主義的に還元する戦略について見た。そこにおいて還元は成功したかのように思われたが、ここで意識の表象理論はある問題に直面する。それは、主題的に論じられることは少なかったものの、以下で示すようにいく人かの哲学者によって言及されてきた、いわゆる「例化の問題」である。

意識の表象理論は、クオリアを経験の対象が持つと表象される性質として説明する。たしかに、この説明によると、真正な知覚経験の場合、意識に現れる性質は外界の対象が例化する性質であるため、クオリアを物理的世界に位置付けることができる。しかし、この説明にはうまくいかない場合がある。錯覚あるいは幻覚の場合である。というのも、錯覚や幻覚の場合、経験に現れる性質は実際に例化されている外的性質ではないからである<sup>5)</sup>。これについて信原は次のように述べる。

クオリアが経験の志向的特徴だとすれば、クオリアは例化された性質ではありえない。表象の志向的特徴は、表象〔媒体〕によって表象される

特徴である。たんに表象されるにすぎない特徴が、例化された特徴であることはありえない。(信原 2002, p. 122)

ここで重要なのは、ある表象媒体が表象される性質  $F$  を表象することと、 $F$  が実際に例化されていることは、別の事態であるということである。すなわち、ある表象媒体が  $F$  を表象しているとしても、そこから  $F$  が実際に例化されているということは導けない。例えばハーマンは、このことについて次のように述べる。

ユニコーンの絵は何かについての絵である。すなわちそれは特定の内容を持つ。しかしその内容は何か現実のものと対応するわけではない。というのも、その絵が表象するものは存在しないからである。(Harman 1990, p. 34)

ユニコーンの絵はユニコーン性を表象しているが、だからと言ってユニコーン性そのものが世界のどこかで例化されている(ユニコーンが存在する)と考える必要はない。同様に、表象媒体である脳が、ある感覚的性質を表象するとしても、それは、その感覚的性質が例化されていることを意味しない。そして、まさに幻覚と錯覚の場合が、表象媒体である脳がある感覚的性質を表象しているのにも関わらず、その感覚的性質が例化されていないという事態の実例なのである。同様の論点を鈴木は次のように述べている。

この問題〔例化の問題〕は、誤った経験において先鋭化する。眼前に赤いものがないにもかかわらず、赤いものの視覚経験が生じているとき、われわれには、経験される世界にはたしかに何か赤いものが現れており、存在しているように思われる。しかし、表象主義によれば、そのときに生じているのは、赤さを表象する機能を持つ脳状態が生じるということではなく、私の脳のなかにも、私の周囲にも、赤いものは一切存在しないことになる。このことは、きわめて反直観的であるように思われる。(鈴木 2007, p. 252)

以上のことが正しいならば、少なくとも幻覚や錯覚の場合、クオリアは外界の対象に物理的に例化されている性質であるとは言えず、したがって物理

主義的な還元ができないことになる。このような例化の問題を抱えるがゆえに表象理論によるクオリアの物理主義的還元は不十分であると考えられる。

### 3. 例化の問題への応答

前節では、意識の表象理論が例化の問題を抱えるがゆえにクオリアの物理主義的還元を達成していないように思われることを見た。しかし表象理論の擁護者が皆、この帰結を受け入れるわけではない。本節では、表象理論の擁護者による例化の問題へのいくつかの応答を見る。そして、それらが問題点を持つことを示し、例化の問題が還元主義の枠組みにおいては解決困難であると論じる。

#### 3.1 「みんなの問題」

W. ライカンは、「存在しないものがある(There are things that do not exist)」ということ認めることで例化の問題に応答する(Lycan 2019, sect. 4.1)。前節で確認したように、例化の問題が先鋭化するのは幻覚の場合である。というのも、幻覚の場合、クオリアが例化されるべき経験の対象は存在しないからである。しかし、存在しないながらも、なんらかの意味でクオリアを例化する対象がある、とすることができれば、例化の問題は解決したことになるかもしれない。

この応答の問題点は、存在しないものがあるということは、一見して矛盾であるように思われることである。これに対してライカンは、「存在しないものの形而上学はみんなの問題(everyone's problem)であり、表象主義者に特有の問題ではない」(ibid.)と述べ、例化の問題について表象理論に説明責任がないことを主張している。

たしかに、志向的对象や架空物など、存在しないが、ある意味で「ある」と言えるものについての存在論的身分がいかなるものなのかは、哲学全体にとっての難問であり、表象理論がこれに答えられなくても、そのことは表象理論の欠点を示すのではなく、単に哲学全体に未解決問題があることを示すだけである。

しかしそうだとすると、以上のような応答は、例化の問題を解決するものではなく、むしろ例化の問題の解決困難性を示していると考えられる。というのも、以上の主張が正しければ、例化の問題は哲学全体に関わる難問であるということになるからである。

一方、みんなの問題として先送りせずに、クオリアが例化される対象が何かについて論じる表象主義者もいる。例えば山口(2012)は、可能的個物を用

いてクオリアの実在性を説明しようとする。可能的個物は現実世界には存在しないが、可能世界に存在するという意味で「ある」と言えるものであるので、「存在しないものがある」とはどういうことかを矛盾なく説明している。そして、クオリアはそのような可能的個物が持つ物理的性質として捉えることができる(山口 2012, p. 252)。

しかし可能的個物は、可能世界における実在性を持つだけであり、現実世界における実在性を持たない。すなわち、可能的個物は現実世界に物理的に存在する対象ではない。したがって、クオリアが可能的個物の性質だとすると、クオリアを物理主義的に還元したとは言えないように思われる<sup>6)</sup>。

### 3.2 自然主義的観念論

以上のように、例化の問題をみんなの問題として捉えると、その解決は困難であるように思われる。したがって、みんなの問題を回避するような仕方での応答が望まれる。

そのような応答として示唆に富むのは、鈴木(2015)が提示した自然主義的観念論である。これは表象理論の一種であるが、例化の問題の解決にあたって、物理主義的な還元とは異なる仕方でもクオリアの物理主義的説明を試みる。自然主義的観念論の戦略は、簡単に言えば、クオリアを「経験される性質」として特徴づけた上で、それがいかにして事物に例化されるかを物理主義的に説明することによって、みんなの問題を回避しつつ、例化の問題を解決するというものである。

経験される性質とは、「経験主体の表象システムのあり方に相対的な、外界の事物の性質」であり、それは物理的な関係的性質でも内在的性質でもないため、「物理的性質には還元できない」性質だとされる(鈴木 2015, p. 172)。物理主義的に還元できないものの存在を認めるということは、物理主義の擁護を断念したかのように思われるが、鈴木によるとそうではない。というのも、「意識の自然化における物理主義者の真の課題とは、意識経験を他のものに還元することではなく、意識経験に物理的世界における独自の身分を与えること」(ibid., p. 179)であり、そして実際に、次のようにして「独自の身分を与えること」は可能であるからである。

経験される性質は、なんらかの物理的性質に還元されることによって、物理的世界に位置付けられるのではない[……。]。物理的性質を持つ事物からなる環境の中に本来的表象を持つ生物が存在するという、それ自体と

しては物理主義的に理解可能な事態が成立することによって、物理的性質に還元不可能な性質が、物理的世界の新たな構成要素となるのだ。このような考え方を、自然主義的観念論と呼んでもよいだろう。(ibid., p. 178)

「本来的表象」とは他の表象による媒介なしに、あるシステムに利用されるような表象のことである(ibid., p. 130)。例えば、生物の知覚状態は、媒介となる表象なしにその生物の行動システムに利用されるため、本来的表象であるが、文字や絵などはそれを読んだり見たりする認知・知覚状態を媒介して行動システムに利用されるため、本来的表象ではない。ある生物が本来的表象を持つことは、その生物が外界の性質を行動に利用可能な仕方で分節化して表象することであり(ibid., p. 142)、そのような仕方で分節化された性質が経験される性質である。以上のように、自然主義的観念論による経験される性質の説明自体は、物理的なものだけが用いられている。

経験される性質の存在を認めることができれば、クオリアを物理的世界に位置付けたことになる。このことから鈴木は「意識経験の実在性をめぐる物理主義者の〔消去主義を受け入れるか物理主義を断念するかという〕ジレンマは、〔物理主義的説明とは物理主義的に還元することであるという〕誤った前提にもとづくものだったのだ」と結論づける(ibid., p. 182)。このような自然主義的観念論の主張の趣旨は、次のように表現することができる。すなわち、クオリアの存在の物理主義的説明に物理主義的還元は不要である、ということである。

以上のような鈴木の応答は、ライカンの言う「みんなの問題」をうまく回避している。というのも、経験される性質は、それ自体は物理的でないにせよ、それを例化するものは外界に存在する事物であるため、「存在しないが、ある意味で「ある」と言えるもの」を用いずにクオリアを説明しているからである。

しかし、自然主義的観念論のアプローチにも問題点がある。というのも、説明の要となっている経験される性質がいかなる性質なのかが明らかではないからである。それは外的事物の性質でありながら、外的事物の内在的性質でも関係的性質でもない(ibid., p. 172)というが、そうだとしたらいかなる性質なのか疑問が残る。もし経験される性質がこのようなネガティブな特徴づけしかできない性質だとすると、それが物理主義的に本当に許容できる性質かどうか疑問の余地があり、その説明は不十分であることになる。しかし

これは逆に言えば、経験される性質にポジティブな特徴づけができるとすれば、十分な説明になりうるということでもある。以下ではその可能性を探ってみよう。

物理主義としての自然主義的観念論を守るためには、経験される性質のポジティブな特徴づけが物理主義的に無害なものでなければならない。そのような特徴づけの候補として考えられるのは、それを外界の事物が持つ傾向的性質（傾向性）として特徴づけることである。傾向的性質とは、ある一定の条件下で一定の特徴を発現するという性質のことである。標準的には、それは次のように定式化される(柏端 2017, p. 168)。

個物  $x$  は傾向的性質を持つ<sup>df.</sup> もし適切な状況  $C$  のもとで出来事  $T$  が生じたならば、 $x$  に出来事  $M$  が生起する

さて、経験される性質として例えば赤さを挙げるなら、ある外界の事物が経験される性質である赤さを持つ（赤い）ことは、次のように傾向的性質として定式化できる(cf. 小草 2018)。

外界の事物  $x$  は赤さを持つ<sup>df.</sup> もし適切な状況  $C$  のもとで経験主体  $S$  が  $x$  を見たならば、 $x$  は  $S$  の表象システムに赤いものとして表象される

この定式化は、定義項に経験主体  $S$  の表象システムが入っており、かつ赤さを外界の事物に帰属させているので、「経験主体の表象システムのあり方に相対的な、外界の事物の性質」という経験される性質の定義に合致している。また、この定式化において、適切でない状況では、赤さを表象する表象状態を生じさせるべき対象が別の表象状態を生じさせることになりうるが、この説明は、鈴木による「生物の知覚システムにおいては、標準的でない状況では、ある表象状態を生じさせるべき対象が別の表象状態を生じさせることになる」(鈴木 2015, p. 180)という幻覚についての記述と合致する。このように、経験される性質を傾向的性質と考えることは、自然主義的観念論の立場から見てももっともらしいはずである。

以上のように、経験される性質を傾向的性質としてポジティブに特徴づけることによって自然主義的観念論の問題は解決されただろうか。残念ながらそうではないように思われる。なぜなら、以下のように説明に難点が現れる

からである。

経験される性質が傾向的性質だとすると、それが物理的性質に還元される必要がないという鈴木的主張には困難がある<sup>7)</sup>。というのも、外的な事物の傾向的性質は、その事物が持つ因果的基盤によって実現されているため、その事物の内在的性質だからである(柏端 2017, pp. 170-1)<sup>8)</sup>。例えば、導電性は傾向的性質であるが、銅が導電性を持つことは、銅が持つ〈自由電子が多い〉という因果的基盤によって実現されている。それゆえ導電性は銅の内在的性質である。

鈴木は、「外的事物の性質には、(10cm であるや 1kg であるといった) 内在的性質と(x よりも大きいや y の右にあるといった) 関係的性質があるが、経験される性質はそのどちらでもない」(鈴木 2015, p. 172)ことを前提として、経験される性質は物理的性質に還元される必要がないと論じるが、上の議論が正しければそもそもその前提には問題があることになる。というのも、経験される性質は外界の事物の傾向的性質であり、それゆえ内在的性質であると考えられるからである<sup>9)</sup>。そして、そうである以上、物理主義的に還元される必要がある。例えば、傾向性としての色の因果的基盤は、物体の表面反射特性へ還元される必要があるだろう。

そうだとすると、自然主義的観念論はやはり例化の問題を免れ得ない。経験される性質が外界の対象に例化される内在的性質であるだとすると、それが物理的世界に位置付けられるためには、物理的性質に還元されねばならないからである。すなわち、クオリアの存在の物理主義的な説明に物理主義的還元は不要であるという鈴木の見立てに反して、やはり還元が必要だったのである。しかし還元することはできない。なぜなら、経験の対象が物理的に存在しない幻覚の場合、経験された性質の因果的基盤である内在的性質を例化する物理的対象は存在しないからである。例えば、見ていると思われる物体が存在しない幻覚経験において、色性質の因果的基盤である表面反射特性を例化する物体は存在しない。したがって、経験された性質を物理的世界に位置付けることはできず、自然主義的観念論も、クオリアの物理主義的説明において未だ困難を抱えているように思われる。

ただしもちろん、自然主義的観念論が有望な理論であることは依然として確かである。それは例化の問題を抱えているとは言え、それ以外の点では物理主義的立場としてもっともらしい。また、経験される性質に対する異なるポジティブな特徴づけによって、自然主義的観念論がクオリアの存在を物理主義的にうまく説明する可能性もある。しかし、本論では、それ以外のアプローチとして消去主義があることを強調したい。

#### 4. 例化の問題が示唆すること

前節では、例化の問題への表象理論からの応答が課題を残していることを示し、この問題が解決困難であることを明らかにした。これは意識の哲学に対して何を示唆するのだろうか。

意識の表象理論は、意識経験の物理主義的説明として最も有力なものである。しかし、それは例化の問題を抱えており、表象理論を受け入れるならば、物理主義者は次のどちらかの道を選ばなければならない。一つは、還元主義の立場を保持し、例化の問題の解決法を模索する道、もう一つは、還元主義を放棄し、消去主義の立場をとる道である。私には、後者の道、すなわち消去主義の方が有望であるように思われる。というのも、消去主義の立場をとれば、以下で見るように、例化の問題の解決法を模索する必要がなくなり、意識の表象理論の説明力を十全に引き出すことができるようになるからである。

まず、ライカンが主張するように、還元主義としての表象理論が抱えている例化の問題の本質が「みんなの問題」であるとしよう。「みんなの問題」は、「存在しないものがあるとはいかなることか」という問いであった。「存在しないものがある」というのは一見して矛盾であり、その説明は困難に思われる。一方、消去主義の立場をとれば、幻覚や錯覚の場合、そもそもクオリアを例化する対象などない。したがって、説明責任の免除を訴えるまでもなく、みんなの問題に関わる必要はなくなる。

もちろんここで、みんなの問題の代わりに、「存在しないものがあるかのように思われるのはいかなることか」という問いが生じる。この問いは「イリュージョン・プロブレム」と呼ばれるものである(Frankish 2016)<sup>10)</sup>。しかし、「存在しないものがあるかのように思われる」というのは矛盾ではなく、その説明は比較的容易であると思われる。消去主義をとることで、困難なみんなの問題が、取り組みやすいイリュージョン・プロブレムに置き換えられたのである。

そして、イリュージョン・プロブレムへのアプローチとして、物理主義者は意識の表象理論を用いることができる。すなわち、存在しないものがあるかのように思われるのは、我々が存在しないものを表象することができるからである。ここで、例化の問題、すなわち表象されたものの性質が、幻覚や錯覚の場合、実際に例化されている性質と考えることができないということは、もはや表象理論の欠点ではなく、我々の経験のあり方を正しく捉えていることになる。というのも、消去主義によると、少なくとも幻覚や錯覚の場

合、クオリアは例化されていないという主張が正しいからだ。

また、クオリアを（可能的に）例化する対象の可能的個物としての説明や、クオリアの経験される性質（傾向性）としての特徴づけは、イリュージョン・プロブレムの解決を後押しするだろう。それらはいずれも、クオリアの実在性の理解に困難を抱えていたが、消去主義においてそのことはもはや問題ではない。それらの説明は、クオリアを実在しないものと正しく特徴づける有望な物理主義的理論として、消去主義的な意識の理解を前進させるものである。すなわち、消去主義においてこそ、意識の表象理論の説明力は十全に引き出されるのである。

ここで、消去主義としての表象理論が意識の問題に対してその説明力をいかに発揮するのかを簡単に見てみよう。消去主義における意識の問題は、上述のように、「みんなの問題」でもハード・プロブレムでもなく）イリュージョン・プロブレムである。それは、幻覚や錯覚の場合、実際に例化されていないクオリアが、なぜ例化されているかのように思われるのか、という問いとして表現することができる。意識の表象理論、特に自然主義的観念論は、この問いに対してもっともらしい解答を有している。曰く、クオリアが例化されているかのように思われるのは、本来的表象を持つ生物が存在し、それが経験される性質を表象するからである。経験される性質は傾向性として物理主義的に無害な形で理解することができ、そしてそれは幻覚や錯覚の場合、例化されていない。例化されていない性質が例化されているかのように思われるという事態は、自然主義的観念論の言葉を借りれば、「生物の知覚システムにおいては、標準的でない状況では、ある表象状態を生じさせるべき対象が別の表象状態を生じさせることになる」（鈴木 2015, p. 180）という事態である。このように、自然主義的観念論のアプローチはイリュージョン・プロブレム解決の可能性を秘めている。

以上のように、意識の表象理論は還元主義として問題を抱えているものの、消去主義として有望な理論であると言える。例化の問題の存在は、意識の表象理論が消去主義として真価を発揮する可能性を示唆しているのではないだろうか。

## 注

- 1) 本論では意識の問題への物理主義的アプローチとしての表象理論について論じるが、表象理論は必ずしも物理主義の擁護に用いられるわけではない。
- 2) もちろん、以上のような経験の透明性による議論には疑問の余地がある

ことが指摘されている(cf. Kind 2003)。しかし、この議論が成功しているかを検討することは本論の目的から外れるので、本論においてはこれを前提とする。

3) 対象の性質であるようなものをクオリアと呼ぶには抵抗がある向きもあるかもしれない。たしかに、現行の議論ではクオリアは特に経験の性質を指す語として用いられ、意識の主観的側面を広く指す語としては「現象的性格」が用いられる。しかし、現象的性格であることは対象の性質であることを含意するわけではないので、経験の性質と対象の性質の対比を、クオリアと現象的性格の対比として表現するのは不自然である。また、クオリアは C. I. ルイスによる最初の用法において経験の(直接の)対象の性質であったし(Lewis 1929, cf. Crane 2000)、本論で示したように、ドレッキも対象の性質としての捉え直しが可能だと考えている。以上のような理由から、本論では意識の主観的側面を説明するために措定される性質を一貫してクオリアと呼ぶ。

4) このような立場は、現象的外在主義(phenomenal externalism)と呼ばれる(cf. Dretske 1995, chap. 5)。

5) レヴァインの報告によると、ドレッキも例化の問題に自覚的であったようである。「彼〔ドレッキ〕は実際、クオリアを我々の心的状態の性質ではなく対象の性質としたいように見える。一方で、議論において彼はその見解〔表象理論〕のこのバージョンを幻覚のような現象と調和させることが難しいことを認めていた」(Levine 2003, p. 59n)。

6) ただし、山口は自身の見解が消去主義と呼ばれうることを認めている(山口 2012, 8.7 節)。しかしそれは本論の指摘する理由とは異なる理由からであり、例化の問題とは異なる文脈における議論である。

7) ここで、物理主義的に還元されないという特徴を経験される性質の定義的特徴と考えると、経験される性質と傾向性は定義上同一視できないということになるため、経験される性質と傾向性が同一視できるという前提を置くと例化の問題を免れないという続く本論の議論は、前提が偽であることが示されたのだから余計であるように思われるかもしれないが、そうではない。というのも、鈴木が表象主義者であるという背景を踏まえると、経験される性質の定義的特徴はあくまで「経験主体の表象システムのあり方に相対的な、外界の事物の性質」という部分であり、物理主義的に還元されないという特徴は定義的ではないと考えられるからである。

8) 因果的基盤である事物の内在的性質と同一視するのは異なる仕方では傾向性を理解する説(例えば力能説)はあるが、そのような説のほとんどは

物理主義と折り合いが悪い。

9) 分かりやすさを優先し、傾向性とその因果的基盤である事物の物理的内在的性質は同一であると説明しているが、ここでの論証を成立させるためだけなら、より弱い主張——内在的性質の例化は傾向性の例化の必要条件であるという主張——をするだけで十分である。

10) イリュージョン・プロブレムという命名はフランキッシュによるが、その発想はデネットに由来する(Dennett 1991)。また、同じくデネットの発想を受け継ぐ篠原(2008)もイリュージョン・プロブレムと思われる問題について論じている。注記しておく、本論では用語としての普及の度合いを考慮して「消去主義」という名称を用いたが、フランキッシュが指摘するように、このような立場は意識のハード・プロブレムの存在を単に否定するのではなく、イリュージョン・プロブレムに置き換えるという立場であるので、消去という語はミスリーディングであり、「錯謬主義(illusionism)」という呼び名がふさわしい(Frankish 2016)。

## 文献表

- Chalmers, D. (2010) *The Character of Consciousness*. Oxford University Press. (『意識の諸相』上・下、太田紘史、源河亨、佐金武ほか訳、春秋社、2016年。)
- Crane, T. (2000) “The Origins of Qualia” *The History of the Mind-Body Problem*. Tim Crane & Sarah Patterson (eds.), London: Routledge, pp. 169-194.
- Dennett, D. (1991) *Consciousness Explained*. Little, Brown. (『解明される意識』山口泰司訳、青土社、1998年。)
- Dretske, F. (1995) *Naturalizing the Mind*. MIT Press. (『心を自然化する』鈴木貴之訳、勁草書房、2007年。)
- Fish, W. (2010) *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. Routledge. (『知覚の哲学入門』源河亨ほか訳、勁草書房、2014年。)
- Frankish, K. (2016) “Illusionism as a Theory of Consciousness” *Journal of Consciousness Studies*, 23 (11-12), pp. 11-39.
- Harman, G. (1990) “The Intrinsic Quality of Experience” *Philosophical Perspectives 4: Action Theory and the Philosophy of Mind*, Atascadero, J.E. Tomberlin (ed.), Calif.: Ridgeview, pp. 31-52.
- Kind, A. (2003) “What’s so transparent about transparency?” *Philosophical Studies*, 115, pp. 225-244.

- Levine, J. (2003) “Experience and Representation” *Consciousness: New Philosophical Perspectives*. Smith, Q., and A. Jokic (eds.), Oxford University Press.
- Lewis, C.I. (1929) *Mind and the World Order: Outline of a Theory of Knowledge*. Dover Publications, Inc.
- Lycan, W. (2019) “Representational Theories of Consciousness” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Edward N. Zalta (ed.), <<https://plato.stanford.edu/entries/consciousness-representational/>>
- Nagel, T. (1974) “What is it like to be a bat?” *The Philosophical Review*, Vol. 83, No. 4, pp. 435-450
- Tye, M. (2014) “Transparency, qualia realism and representationalism” *Philosophical Studies*, 170, pp. 39-57.

- 小草泰 (2018) 「色の傾向性理論を擁護する——色の現象学と存在論」『科学基礎論研究』 第45巻、1-21頁。
- 柏端達也 (2017) 『現代形而上学入門』 勁草書房。
- 鈴木貴之 (2007) 「訳者解説」 F. ドレツキ 『心を自然化する』 鈴木貴之訳 勁草書房。
- (2015) 『僕らが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか——意識のハード・プロブレムに挑む』 勁草書房。
- 篠原成彦 (2008) 「クオリアとクオリア実感」 長滝祥司・柴田正良・美濃正 編 『感情とクオリアの謎』 昭和堂、198-217頁。
- 信原幸弘 (2002) 『意識の哲学——クオリア序説』 岩波書店。
- 山口尚 (2012) 『クオリアの哲学と知識論証——メアリーが知ったこと』 春秋社。